誤　用

浅山　佳郎

外国語を学習する者にとって、誤用は、その外国語の難しさを思い知らされるものだが、言語を扱う者にとっては、たいへん興味深い現象となる。以下は、日本語教育での誤用についての、僕自身の最近の失敗した試みの報告である。

当面の僕自身の関心にしたがえば、誤用の原因は大きく2つに分けることができる。1つは学習者の母語の反映で、もう1つは学習者の形成する言語能力の限界である。

たとえば、前者の例として、次のような誤用をあげてみる。

(1) **警察に入って柔道のもっと厳しい稽古を練った。**

これは中国語を母語とする日本語学習者の作文からとった。原因は、中国語で「稽古を積む」ことを「練工夫」と表現することにある。日本語と中国語が同じ漢字を用いるので、「練（lian)」という中国語動詞がそのまま「練る」という日本語動詞にうつり、「工夫（稽古）を練る」という誤用が生ずる。

いっぽう、外国語学習者は、頭脳の中にそれぞれの段階における対象外国語の体系を形成している。しかし、この体系は完全ではないので、誤って適用してしまい誤用を起こすことがある。これが2つめの原因なのだが、これには母語は関わらない。たとえば、次のような例をあげることができる。

(2) **先生の病気が治されたらいいなと思っていました。**

この誤用をおかした学習者は、日本語の可能表現を、「動詞に助動詞（ラ）レルを付ける」と学習している。そこで、「仕事を続ける－仕事が続けられる」などと同じ操作によって、「病気を治す－病気が治される」と作る。しかし、現代日本語では、いわゆる5段動詞の可能は可能動詞形と呼ばれるかたち、つまり「治す」であれば「治せる」のかたちが優先する。学習した構文を、使うべきではないところに過剰に適用してしまうのが、この誤用である。

さて、試みてみたかったのは、誤用の傾向を特定することだ。もっと言えば、単純な母語の反映より、不完全な言語体系の過剰な適用の方が多いのではないかという予想を立てたのだ。

取り上げた誤用は、以下のようなものである。「木を枯らす」という他動詞の文と、「木を枯れさせる」という自動詞使役の文の2つは、同じような意味の文として存在する。しかし「窓を開ける」に対しては「窓を開かせる」という自動詞使役が不適格だし、逆に「生徒を立たせる」に対しては「生徒を立てる」という他動詞が不適格である。ここに誤用が起こる。

先に述べた2種の誤用原因の仮定から、このタイプの誤用については、以下の2つの予想を立てることができる。母語の反映としては、中国語が使役という構文より、他動詞という語彙を多用することから、必要な使役構文が欠落するだろうと予想される。いっぽう、学習者の日本語体系としては、個々の単語で形の異なる他動詞より、「～ニ～

（サ）セル」という一定の形式を持つ使役構文のほうが、習得が容易で応用が効くから、不要な使役構文が出現するだろうと予想される。この２つの予想は完全に相反する。

分析の対象としたのは、僕が対照研究の対象としている中国語を母語とする日本語学習者の作文である。彼らの作文から、「他動詞－自動詞使役」の文を集める。さらに、その文を母語である中国語に戻させる。次に、誤用例についてはそれを正しく直す。こうして、同じ意味内容について３種類の文が集る。１つめは正しい中国語の文、２つめは中国人の作った日本語の文、３つめは正しい日本語の文である。

詳しいことは省くとして、簡単な結果の１つは、以下の数値である。これは、上のようにして集めた３種類の文それぞれで、自動詞使役文と他動詞文のどちらを多く用いているかというめやすとなる。

(3)

	中国語	中国人の作文	正しい日本語
自動詞使役文	16%	30%	33%
他動詞文	84%	70%	67%

ところが、この数値では、中国人の日本語作文について、２つの相反する予想が２つとも成立することになる。つまり、正しい日本語と比べると他動詞文が多いから、母語である中国語が反映していると見ることもできる。しかし、中国語と比べると自動詞使役文が多いから、応用の効く構文的処理が優先しているとも見える。

２つのことがらがともに成立するからには、どういった条件ではどちらが優先するのか、またはどの範囲でどちらが機能しているのか、といった問題が解決されなければならない。さもなくば、「他動詞－自動詞使役」の誤用については、「どっちもあり」という無意味なことしか言えなくなるからだ。しかし、２つの要素のそうした関係を見出す試みは、いまのところうまくいっていない。言えるのは、構文的処理の有利性に、母語の影響が歯止めをかけているということくらいである。

結局のところ、実際の誤用は、先述の２つの原因のどちらかに一方的に帰するわけではないのかもしれない（(1)と(2)の例も、本当はもっと複雑な原因を持っている）。そして、僕は、誤用をおかした学習者以上に、あいかわらず誤用のプロセスと原因の整理に頭を悩ますことになる。

つまり、やっぱり、誤用は難しい。